

---

# 俺の青春を返せ！

高田高

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

俺の青春を返せ！

### 【コード】

N2641E

### 【作者名】

高田高

### 【あらすじ】

気付けば死を迎えていた俺。そして現れた天使。そして、そして、怒涛の展開。果たして俺はどうなるんだろうか？生き返る事が出来るんだろうか？ 原案提供者【和藤渚様】

俺の青春を返せ！

俺の青春を返せ！

突然だが、俺の体がスケルトン仕様になってしまった。手の平を太陽に透かしてみれば、あら不思議。太陽さん、コンニチハ。ぶっっちゃけ死んでしまったらしい。

死んだ理由は…… あ、あれ？ 思い出せない。 どうやら急なアルツハイマーに見舞われたようだ。

人間誰しも、死ぬ瞬間なぞ覚えていたくなどない。多分、忘却の願いが天におわす方々に届いたのだろう。ついでに言えば、他の記憶もいくつか欠落している気がする。

彼女の名前が思い出せない。とか。

いや、待て。もしかして、彼女いなかったただけデスカ？

ふざけんなよ！ 彼女とよろしくやる前に、ヘブンスドアーに疾走してしまったと！？ ダメ！ 絶対！

わめいても声は出ないようだ。仕方ない。

やる事もないし、体もなんかふわふわするし………寝よ。

「寝ちゃダメよ」

ダメ、後五分。

「起きなさい！ 宏！」

俺、和紀。

……ん？ さっきから聞こえる女の声は、幻聴？

幽霊にも、幻聴とか聞こえたりするものなのか？

聞こえた声に目を開けると、そこにいたのは真っ白いローブ姿のブロンド少女。背中には大きな白い翼が左右に二枚ずつ、計四枚広

げられている。

「あんた天使？」

「はい。天使です」

詐欺っぽいのが、死んだやつペテンに掛けても得はないだろうし、本物だろうな。しかし、天使って実在するんだな。

「んで、俺になにか？」

「あなたはつい数時間前、炭酸飲料ごときでベロンベロンに酔っ払い、揚句女性のお尻を触り回り、そして帰りの電車をホームで待っていた際、奇声を上げながら線路にダイブ。ミンチになり、十七年の短い人生を終了させました」

最悪だ。

そんな人生の最後を迎えたわけか、俺は。そりゃあ忘れてしまいたいよ。

つか、なんでそれをわざわざ教えてくれちゃうわけ？ 悪魔か！？

「そんな、どーしようもないあなたですが、ホントどーしようもない、ぶつちやけ顔を見るのもためらう程にサイテーヤローなあなたですが、実はそんなクズヤローにやってもらいたい事があるんです」

凄まじく言いたい放題だな、この天使！ 天使か？ こんなで天使か！？

「あなたにはこれから、一時的に現世に戻り、ある少女を助けてもらいたいと思います」

俺の青春を返せ！

天使の表情は、先程までのかつたるそうなものから一転、真剣な表情に変わり、向ける視線にも力強さとも言うのか、そんなものを感じる。

そんなの知らねーよ、ばあーか。とか言う程非道じゃないし、拒否する理由もない。

俺がうなずくのを確認すると、天使はなんとも言えない可愛らしい笑みを、俺に向けてくれやがった。

鳴るはずのない鼓動が、俺の体を強く打った気がしたのは、恐らく気のせいだろう。

俺はどこかの部屋で目覚めた。病院とか霊安室とかではない。

ベッドで寝ているのがわかる。つまり触覚がある。

掛けられた布団をどかすと、頬に触れてみる。熱をすっかり感じる。

「おはよう、悟」

和紀だけどね。

呼ばれた声に向くと、そこにいたのは先程の天使　によく似た少女だ。

着ているのは、どっかの高校の制服のようだ。

うーん。スカート短すぎないかい？

起き上がると、調度目に入った姿見。そこに映し出された自分の姿は、生前と違う容姿。な気がする。

なんせ記憶がないから、自分の顔すらいまいち思い出せない。

俺の青春を返せ！

パンクロッカー並につんつんした黒髪、結構男前な顔立ち。

「どうしました、悟」

「和紀ですが」

「ああ、そう」

少女は長いブロンドをくるくるやりながら、つまらなそうに溜息をついた。

お前の名前なんかどうでもいいんだよ、というつぶやきが聞こえて来たが、あえて無視しようか。

「あんた、あの天使だよな？」

俺の質問に少女は、腰に手を当て偉そうに鼻で笑いやがった。

寝起きから血圧がぐんぐん上昇しちまう。

「私はペルデスト。魂の選定をする大天使です」

「ペナントデス？」

わざとらしく間違えてやったわけだが、それをペナント天使は華麗にスルーを決め、部屋にある扉から外へ出て行った。

天使はつまらないジョークが嫌いらしい。

俺一人になった部屋を改めて見回す。

飾りのない箱部屋に、衣服、洗面台、それとさつき見た姿見があるだけ。長時間いたら、時間の感覚やら平行感覚やらがおかしくなりそうだ。

とりあえず俺は、用意されてあった服に着替える事にした。ドク

俺の青春を返せ！

ロプリントのTシャツ、上に黒のジャケットを羽織る。下はダメー  
ジの目立つジーンズ、履物は……ビーチサンダル？

あのペナント天使、面白い事してくれる！

仕方ないのでサンダルをつっかけると、戸を開けた。わけだが。

「……な!？」

そこに広がるのは、青空。俺がいるのは、上空らしい。下を見れば、アリンコのような人間がわさわさ動き回っている。

「なにしてるの?」

俺は戸にしがみつき、目をつぶって体をガタガタ震わせた。ついでに歯もガチガチ鳴らしてやる。

はつきり言っておっかない。だって、落ちたら死ぬよ? このスカイハイ。

「大丈夫よ勝。あなたには今、“なんだかわからないけどすごい力が働いているから、落ちても死なないわ”

なんだかわからないってなんだよ! もっともらしい名前付けろよ!

俺はペナント天使の言う事をとりあえず信じ、足をゆっくり宙に置く。

なんとも不思議だ。床に足を付けたような感触がそこにはある。

これは確かに、なんだかわからないけどすごい力だ。

俺は戸から離れそこに立つと、とりあえず怖いのでペナント天使にしがみついた。

当然物凄い形相で睨み付けられたが、知った事か。やっぱり怖いものは怖い。

俺の青春を返せ!

「それじゃ、正喜。ターゲットを警護しなさい」

「和紀だ！ このペナント天使が！」

「ペルデストよ！」

ペルに蹴り飛ばされたわけだが、どうやら立っていた場所には、見えない足場のようなものがあっただけで、力のお陰ではなかったらしく、足場を踏み外した俺は当然重量に引つ張られ、ロープ無しバンジーなど子供の遊びと笑ってしまえる、ライフライン無しのスカイダイビングを体験する事になった。

なんで足場見えないんだよ！ 茶目っ気にも程があるだろ！

隣に目を向けると、スカートを押さえた格好でペルも一緒に落っこちて来ていた。

「あ……？ あははははー！！ お前、もしかして落っこちたのか！？ 間抜けなやつだなあ、おい！」

「うるさいっ！」

しばらくの落下の後、コンクリートに衝突。ペルは当たり前のように着地し、俺は頭から激突。いや、突撃だな、これは。

頭蓋骨とか脳ミソが若干コンニチハしている。

死にはしないだけで怪我はするわけか。

当たり前だが、周囲は大騒ぎだ。人間が落っこちて来た事に、ではなく、脳ミソがちよっと出ちゃってる人間が元気に歩いている事だ。

俺の青春を返せ！

「ポチ、そのゆるゆるの脳ミソをしまわないと目立つわ。って言う

かキモいんだけど」

「ポチってなんだ！ 俺は犬かよ！」

ペルは首を振って否定すると、おほんと咳をつき、真面目な顔で俺を見た。

どうやら、なにかしら意味のある名前のような。

「ポイ捨てしても微生物に分解される、地球に優しいクズヤロー、の略です」

なにかしら意味はあったが、なんだそれは？ 無駄なトンチ効かせやがって！

カチンと来たが、ダメだ。いちいち相手にしてられん。

俺は割れている頭に手を当ててみた。すると、光が発せられ、傷が塞がっていく。と思う。なにせ自分では見えないから。

「ああ、そうだ。助ける少女ってのは誰だよ」

「ん？ ああ、言ってなかったわね。神様よ」

随分軽い言い方だ。

神様なのに助けが必要なのか？ それになんで俺じゃなきゃダメなんだ？

という疑問を、店先のウィンドウに張り付いて、高級そうなネツクレスを食い入るように見つめるペルに向けてみた。

「これ買ってくれたら、教えてあげる！」

俗な天使もいたもんだ。当然そんなもの買い与える気もないし、

俺の青春を返せ！

もとより金がない。

面倒になった俺は、ペルを無視して歩き出した。

不思議な事に俺には少女　神様のいる場所がわかる。これも力のお陰だろうか。こうなればあんな天使シカトして、神様をさくつと助け、俺の青春を今一度我が手に！

神様助ければ、復活くらいしてくれるはずだ。

ドラゴンなクエストなんて、金払えば教会で復活出来るんだし楽々だろ。

そうと決まれば神様の下にダツシユ！

しかし、俺もとんだバカ野郎だった。

だってそうだろう？

神様が助けを求めるなんてよっぼだ。

「なんだ、あれ！？」

俺が今いる場所は、ラブなホテルの隣にある地下駐車場。そこにいたのは、ワンピース姿のサラサラ黒髪少女と……バカデカイ三つ首の犬。

体長は駐車場の天井に背中が当たるくらいだから、三メートルは軽くある。牙も爪も鋭く黒光りし、よく見掛けるワンコロのものよりよっぼど凶器だ。

そんな奇天烈な生物の前に、少女は突っ立っている。

俺は自分でも気付かないまま駆け出すと、少女を抱きかかえ、直ぐさま反転、逃走開始！

当然だがでっかいワンコロは、俺を全速力で追い掛けてくれちゃうわけ。

俺の青春を返せ！

歩幅の違いで、あっという間に回り込まれた。

「おいおい、なんかヤベーんじゃないの!?!」

「そうだな。原案提供者もビックリな展開だな。今頃口半開きだ」

「は?」

少女らしからぬその話し方も、その内容も気になったが、今はそれどころではない。

獣らしい唸り声を上げながら、ワンコロは警戒しているのか、手を出して来ない。

奇妙だ。俺を爪で薙ぎ払えば終了な事など、ワンコロにもわかるはずだ。

「達くん。あれは君を恐れているのだ」

達くんて誰だよ。

それより、俺を恐れてる? つまり、手を出せないって事か?

それが俺が選ばれた理由なのか。

だとして、どうする?

俺はチンチクリン神様を助けなきゃ、青春とサヨナラしなきゃならんくなる。それはイヤだ。

だがしかし、こいつは俺に手を出せないだけで、神様には危害を加える。

つまり、こいつをどーにかせにやららんわけだ。

「なんか方法はないのかよ。武器的な、兵器的な」

「あれを追っ払うつもりか? ふむ……」

俺の青春を返せ!

神様は真ん丸くりくり目玉を閉じると、なにやら人外語をつぶやきはじめた。

すると、俺の前に端末機器が降って来た。四角形のそのの中央には、『押しちゃダメ』と書かれた赤いボタンが突起している。押しして下さいと言わんばかりだな。

「これ、なに？」

「世界破壊スイッチ。その名もアーマゲドン三号だ」

世界道連れかよ！

いや、それ以上に三号ですと！？ 最低三つはあるわけか？ おつかねえ。

「さあ、押せ」

「無理無理！ 破壊的にも程があるぞ！ 世界ごとやっちゃったら、俺の青春がどうのとか言つてらんないよ！」

神様は舌打ちくれると、再びつぶやき出した。先程より随分早くだ。なんか投げやり感を感じるのは気のせいだろうか。

つぶやき終わると、俺の前に光の球が発生、それは剣へと姿を変えた。金の柄に美しい装飾がされた、白銀の刃を持つ西洋剣だ。

「おおー！ らしいの来たね、おい！」

「勝利すべき者の剣。その名もカリバーンだ」

カリバーン。

俺の青春を返せ！

それに付いてはなぜか知識が残っている。

確かアーサー王が抜いた剣。やんちゃした結果、ぽっきん折れたのを妖精に渡し、戻って来たのがEXカリバーン。通称エクスカリバー。だったような気がする。

とにもかくにも、俺はカリバーンを手に取ると、小脇に抱えていたチンチクリン神様を下ろし、剣を構えた。

「ふむ。お前本気で戦う気か？」

俺は声のする方へ向くでもなくうなずくと、神様つてばえらく深い溜息くれやがる。

「実はな、これコメディーなのだよ。だから真面目な戦闘とかNGだ。わかるか？」

「は？ さっきもそうだったけど、一体なんの話してんだよ？」

とかぺちゃくちゃやっている、随分前からスタンバってくれたワンコロが痺れを切らしたのか、駐車場全体を揺らすように遠吠えを上げた。

やかましいなんてもんじゃない。爆音だ。

「おい、来るぞ」

「え？」

などと間抜けな返事をした瞬間、振るわれた鋭い爪が俺の頭部を襲う。それをとっさにしゃがんでかわしたわけだが、なにやらおかしい。俺は狙われないはずだ。

俺の青春を返せ！

「俺を攻撃して来たぞ！」

「ルールが変わった」

「なにー！？」

神様の話によれば、神様すらを生み出したやつが、この世界の構成を変更したらしい。

つまり、俺はめっちゃめっちゃ狙われるわけで、神様はなぜかサツパリ狙われなくなりやがった。

「もう面倒だし、スイッチ押しでいいか？」

「ダメに決まってるんだろが！」

神様は転がっていたアーマゲドン三号を手にとると、スイッチに向けてゆるゆる指を近付けていく。

ムカツク程ゆるゆるだ。

俺はワンコ口の振るった爪を剣で弾くと、神様に急いで駆け寄り、スイッチを叩き斬ってやった。見事に真つ二つ。

「あー、お前なんて事を。それより後ろ見てみる」

神様の言いたい事はわかっている。

わざわざ振り返る事などせず前方に跳び、神様を押し倒しながら、振るわれた爪をすんでのところで回避した。

事故的に押し倒してしまっただけだが、なぜだか神様は頬を赤くして、意味有りげに目を逸らしちゃったり。

「強引なやつ、嫌いじゃないぞ」

俺の青春を返せ！

あなたの趣味なんて知りませんよ。

俺は立ち上がると、神様を引つ張り起こし、後ろを向いた。

と同時にワンコロが、我慢の限界とばかりに噛み付いてきやがったので、袈裟斬りを放ち、真ん中の頭をフルーツでも割るがごとく一刀両断してやった。

このとんでもパワーも、なにかわからないけどすごい力のお陰だろう。

一頭を失ったのが相当効いたのか、コンクリートの床を真っ黒い血でビタビタに濡らし、弱々しく体を震わせながら後ずさりをはじめた。

「トドメ刺すか？」

「この辺にしておかないと、コメディージャーじゃなくなるぞ？」

「すでにコメディージャーじゃないだろ？ てか、なんの話だよ」

俺が剣を構えるのに反応し、ワンコロは雄叫びを上げると、空間をぐにやりと渦巻き状に歪ませ、そこへ跳び込んだ。

次元を移動したんだろう。

摩訶不思議な状況に、俺はいい加減慣れて来た。

「ガルムを撃退出来たみたいね。私の選定は正解だったわけか」

いつからそこにいたのか、神様の隣にはペルが立っている。

「ガルム？ あの犬の事か。んな事より、神様を助けた俺は当然生き返るんだよな？」

俺の青春を返せ！

俺の言葉にペルと神様は、くすくす笑っている。  
なにを笑うのか、意味がわからない。

「何言ってるんですか？ 生き返るもなにも、あなたは今、神として生まれ変わったんですよ？」

「あ？」

「ふむ。どうやら生前の記憶が残っているようだ。お前は数時間前、人間としての生を終え、魂を浄化、時期神様候補としてペルデストに選定されたのだよ」

つまり、生き返る事は出来ないらしいが、しかし、神様として新たに誕生しちまったようだ。

ちなみに死ぬ以前の記憶が残ってしまう事は、さして珍しくもないんだとか。

「ちなみにポチの管轄はこの駐車場です」

「え？ セコくね？」

「セコくない。私の管轄など、隣のラブなホテルだぞ？ 絶対潰してやる！」

ともかく俺は、“人間”としての青春とオサラバし、これからは“神様”としての青春を迎える事になったわけだ。

「ポチ、三丁目の公園になんか出たようです。撃退しておいて下さい」

俺の青春を返せ！

俺の青春を返せ！

「なんかってなんだよ！　なんで俺なんだよ！　チンチクリンの管轄場所の方が三丁目寄りなんだから、チンチクリンにやらせりゃいいだろ！」

「チンチクリンとはなんだ！　こつ見えて私は」

ペルとチンチクリンもいるし、なかなか楽しくなりそうだ。

終

(後書き)

読んで頂きありがとうございました！

あらすじに

ある通り、これは和藤渚様から提供されたネタですが、九割予想外な展開なはずです。書いてるうちにめっちゃめっちゃになっちまいました。作者自身驚きの展開です。

こんなネタどうよ？とい

う方、メッセなり掲示板なりに書き込んでみて下さい。気まぐれに執筆します。それでは

俺の青春を返せ！

俺の青春を返せ！

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2641e/>

---

俺の青春を返せ！

2009年3月24日09時48分発行